

*** 今日の健康（8月）***

< 子宮頸癌ワクチン（HPV）の効能 >

イギリス（イングランド）で行われた大規模な調査（医学誌『The Lancet』等で発表）によると、12～13 歳頃に HPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンの定期接種を受け、高い接種率（約 9 割）を維持した世代にあたる 20～24 歳の女性において、子宮頸がんによる死亡が 5 年間（2020 年～2024 年）にわたって 0 人であったことが報告されました。

この結果は、性交渉を経験する前の若い時期に HPV ワクチンを広く接種することで、将来の子宮頸がんによる死亡リスクを極めて低く抑え、「ゼロ」に近づけられることを集団レベルで証明した画期的な事例として世界的に注目を集めています。

HPV ワクチンは、子宮頸がんだけでなく、女性・男性を問わず以下のようなさまざまな部位のがんや疾患の予防にも効果があり、男児に対する HPV ワクチン接種も始まっています。

1. 女性特有のその他の生殖器のがん 膣がん・外陰がん

子宮頸がんと同様に、HPV の感染が原因で発生することがあります。ワクチンによってこれらの前がん病変や発症リスクを下げることができます。

2. 男女共通で発症するがん 肛門がん

HPV（主に 16 型など）の持続感染が原因となることが多く、男女ともに発症リスクを軽減する効果が認められています。

中咽頭がん（喉や舌の付け根などの咽頭の部位）

近年、飲酒・喫煙だけでなく、HPV 感染（主に 16 型）が原因となる中咽頭がんが増加傾向にあります。HPV ワクチンは、HPV 感染や中咽頭がんの発症リスクを抑える効果が期待されています。

3. 男性特有のがん・疾患 陰茎がん（男性器のがん）

まれな疾患ではありますが、HPV の感染が発症要因の一つであり、予防効果があるとされています。

尖圭（せんけい）コンジローマ

がんではありませんが、性器の周りにイボができる良性の性感染症です。4 価および 9 価の HPV ワクチン（シルガード 9 など）は、この原因となる低リスク型の HPV（6 型・11 型）の感染も防ぐため、発症を大幅に予防できます。

このように、HPV ワクチンは「子宮頸がんを防ぐワクチン」として広く知られていますが、実際には HPV が引き起こす複数の「がん」や病気を広く予防する効果を持っていますので、女性・男性を問わず予防接種を検討しましょう。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861
天文台通り もみじ山公園バス停裏